

幼稚園教育実習における運動遊びとその指導に関する研究

三浦 累美・市河 勉

松山東雲短期大学

A study on play using the body and guidance of teaching practice at kindergarten

Rumi MIURA and Tsutomu ICHIKAWA

Matsuyama Shinonome Junior College

Kuwabara, Matsuyama

(Received Feb. 2, 2017)

1. はじめに

文部科学省中央審議会が平成14年に「子どもの体力向上のための総合的な方策について」¹⁾ 答申を出している。答申には、文部科学省が昭和39年から行っている「体力・運動能力調査」による子どもの体力・運動能力について、調査開始から昭和50年頃までは上昇傾向が顕著であるが、昭和50年から60年は停滞、昭和60年以降は低下傾向が続いていることが報告されている。さらに、体力・運動能力が高い子どもと低い子どもの格差についてもその広がりが見られ、運動する子としない子の二極化傾向も指摘されている。

「子どもは遊ぶことが仕事である」と言われている中で、子どもの体力・運動能力の低下が指摘され、その原因の一つが「身体を使った外遊びの減少」であることも先の答申で報告されている。

報告されている、近年の体力・運動能力低下の問題を受け、文部科学省では2012年3月に「幼児期運動指針」を発表し、「幼児期運動指針ガイドブック」²⁾をすべての幼稚園におよび保育所に配布した。今まで、文部科学省と厚生労働省の管轄違いであった幼稚園・保育所に共通の運動内容を提示したことになる。その中で、幼児期の運動は、一人一人の幼児の

興味や生活経験に応じた遊びの中で、幼児自らが体を動かす楽しさや心地よさを実感することが大切であり、自発的に遊ぶ機会を十分に保証することが重要であると述べている。

本学保育科において、専門科目として開講されている「体育Ⅰ」「体育Ⅱ」では、幼児期運動指針を視野に入れ、構成しているが、具体的な動きの構成や指導法については、まだまだ不十分な要素が多く、今後の課題と認識している。しかし、学びを通して得た指導力、実践力は、実習において活用されているものと推察され、責任実習でも3割程度の学生は運動遊びを取り入れているのではとの仮説を設定した。そして、取り入れた学生が、指導上、何を問題に感じたか、難しかった点はどんなことかなどについても検討を加えた。さらに、外部講師による運動教室などの導入により、スポーツ活動を積極的に取り入れている幼稚園などの現状についても調査した。

そこで、本研究では、幼児期の運動指導における指導内容やその内容を習得させるための指導のあり方を検討するために、学生が2年間の学びを受け、最後の幼稚園実習において実施される責任実習（総合実習）に注目した。そして、その実習に於いて、上記科目での学びを生かし、運動を主とした内容を

実践しているのか、さらに、その指導法における問題点や課題を明らかにし、今後の保育者養成に役立てることを目的としたものである。

2. 方法

(1) 調査方法

本研究は、本学保育科に所属する学生のうち2年生で幼稚園教育実習に参加した学生を対象とした。調査は、所定の質問紙を用いて2017年12月、集合調査により実施した。調布数は、107、回収率は100%であった。

(2) 本学実習実施状況

本学保育科における保育関連の実習は、次の通りである。

1年生：教育実習Ⅰ（3日間）

1年生：保育実習Ⅰ（保育所 約10日間）

1年生：保育実習Ⅱ（施設 約10日間）

2年生：教育実習Ⅱ 1次（幼稚園 10日間）

2年生：保育実習Ⅲ*（施設 約10日間）

2年生：保育実習Ⅲ*（保育所 約10日間）

2年生：教育実習Ⅱ 2次（幼稚園 10日間）

*印の実習については、どちらかを選択

今回は、短期大学2年間の集大成にあたる最後の教育実習Ⅱ 2次実習を調査対象とした。

3. アンケート結果と考察

(1) 実習先について

いずれも学生の実習園の状況について設問している内容である。まずそれぞれの単純集計から報告する。

①実習園の地域

実習先は、本人の出身地で行うため、中予地区が最も多くなっている。次いで、南予、東予、県外となっている。

表1 実習園の地域（N=107）

	地 域	人 数	割合(%)
1	東 予	20	19
2	中 予	61	56
3	南 予	22	21
4	県 外	4	4

②実習園の経営母体

実習園の経営母体についての設問で、私立が一番多く次いで公立となっている。

表2 実習園の経営母体（N=107）

	地 域	人 数	割合(%)
1	公 立	40	37
2	私 立	67	63
4	国 立	0	0

③保育形態について

選択肢に不明解であったため、未記入が多かった。

表3 実習園の保育形態（N=107）

	形 態	人 数	割合(%)
1	モンテッソーリ	12	11
2	ヨコミネ式	4	4
2	その他	10	9
4	未記入	81	76

④実習先の園児数について

園児数については、150名以下の園での実習が約7割を占めている。

表4 実習園の園児数 (N=107)

	園 児 数	人 数	割合 (%)
1	100名以下	50	48
2	101名～150名	25	24
3	151名～200名	7	7
4	201名～250名	8	8
5	251名以上	14	13

以上が、学生の実習園の基本情報となっている。今回は、実習園別での比較をしていないので実習園については報告のみとする。

(2) 実習中の子どもの遊びについて

実習中の子どもの遊びを調査し、年長、年中、年少のそれぞれ男女別での傾向を比較する。遊びの種類については、主に身体を動かす動的な活動を選択肢としている。従って、子どもに人気のある砂遊びは除外している。

実習期間中、実際の子どもたちがどんな遊びをしていたのか実態調査をすることで、年齢別、性別による遊びの違いについて把握し、援助に役立てる。

①年長 男児・女児について

図1 年長男児

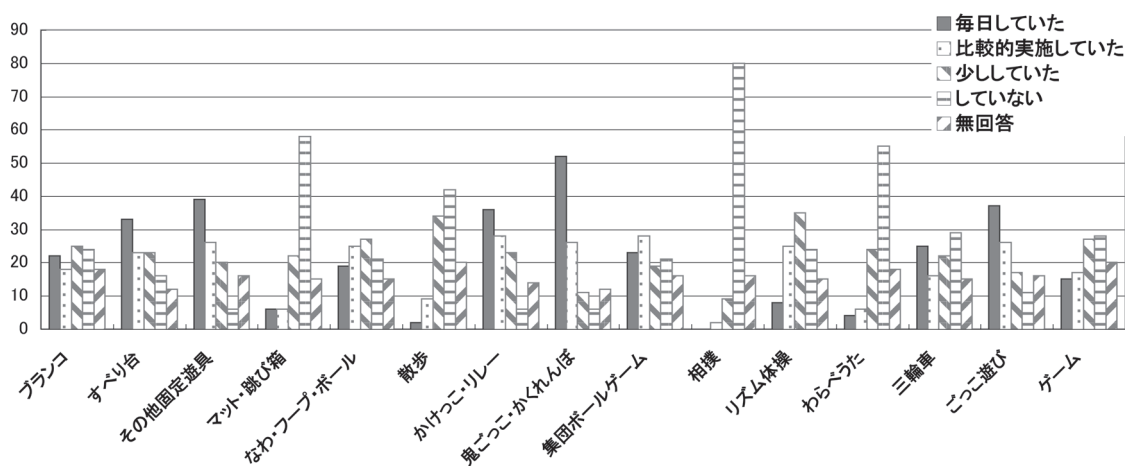
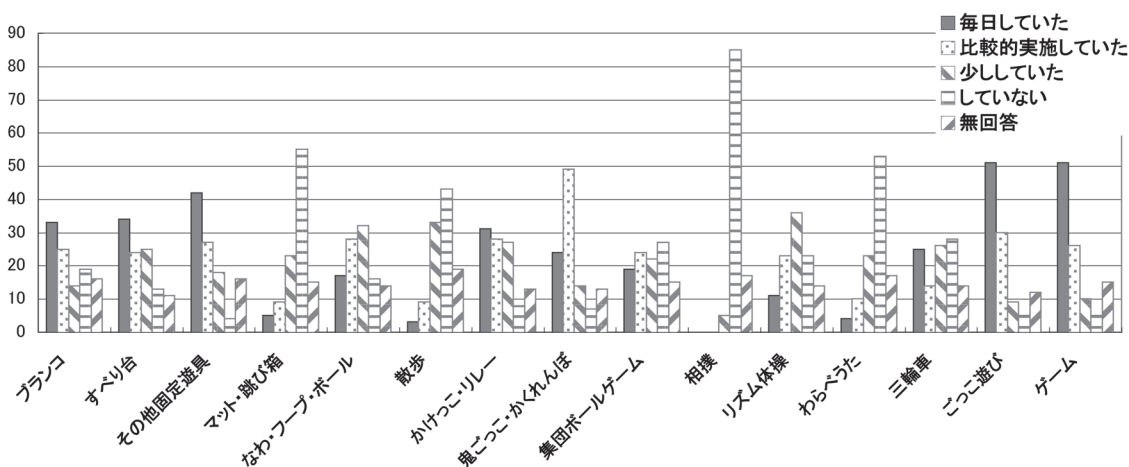


図2 年長女児



男児の場合、半数以上が鬼ごっこ・かくれんぼを毎日していることがわかる。次いで、すべり台・ブランコを含む固定遊具やかっこ・リレー、ごっこ遊びとなっている。

女児の場合、ごっこ遊び・ゲームが最も多く、次いで、すべり台・ブランコを含む固定遊具、かっこ・リレーとなっている。

女児は男児に比べて走るという動的活動よりも、ごっこ遊びやゲームを好んで実施していることがうかがえる。

マット・跳び箱・わらべうた・リズム体操・相撲などは、子どもたちの自発的な活動というより、保育者が意図的に行う活動であるため少なくなっていると推察できる。

②年中 男児・女児について

図3 年中男児

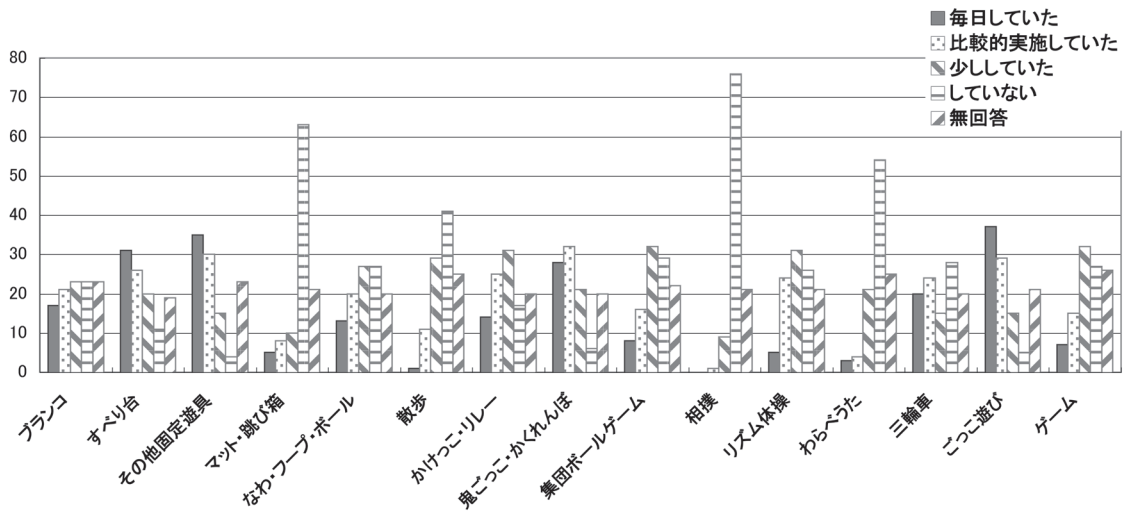
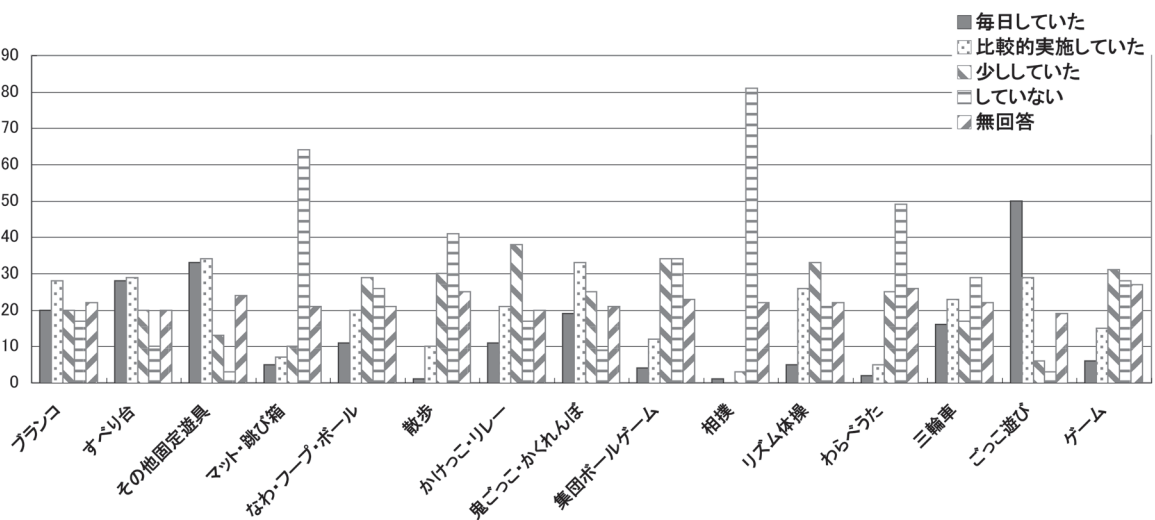


図4 年中女児



男児は、ごっこ遊び、すべり台・ブランコを含む固定遊具、鬼ごっこ・かくれんぼが比較的毎日活動している遊びとなっている。年長さんに比べると走る活動が減ってきているのが特徴と言える。

女児については、年長児と同じようにごっこ遊び

が最も多く、次いで、すべり台・ブランコを含む固定遊具となっている。

さらに、年長児と同じように、マット・跳び箱などの遊びは極めて少ない現状になっている。

③年少 男児・女児について

図5 年少男児

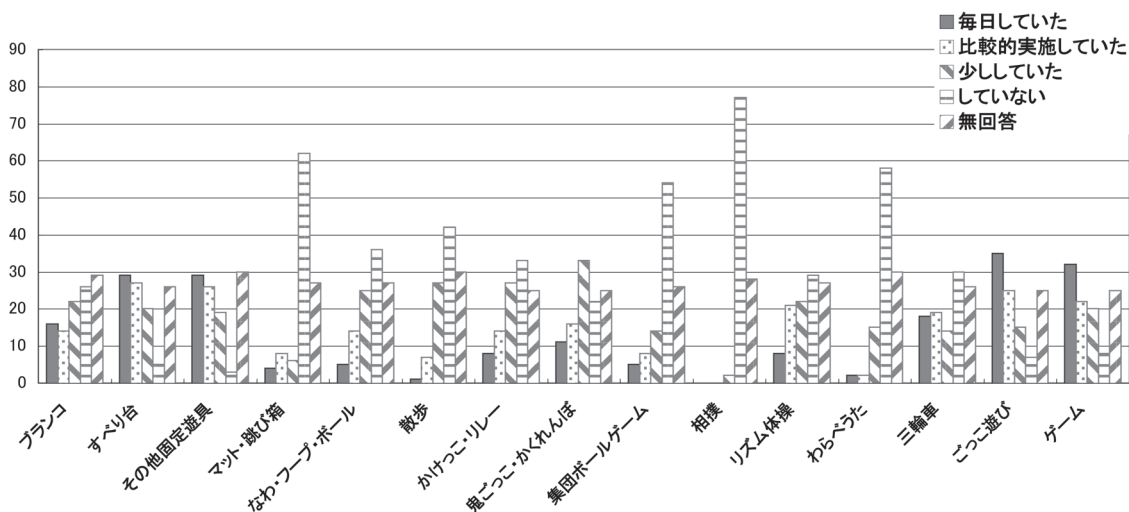
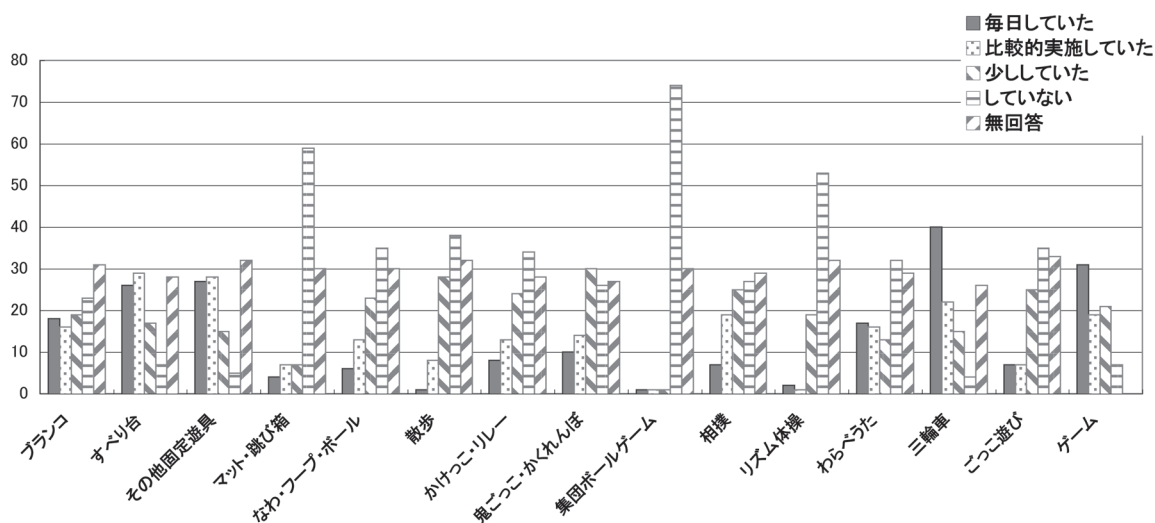


図6 年少女児



男児は、これまでの年長・年中さんと違ってごっこ遊び、ゲーム、すべり台・ブランコを含む固定遊具が上位を占め、走る動き、活動はあまり行われていないことがわかる。

女兒は、三輪車活動が最も多く、次いで、ゲーム、すべり台・ブランコを含む固定遊具となっている。こちらも走る活動は極めて少ない結果となっている。

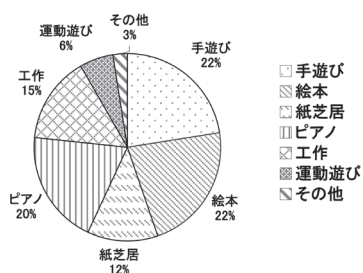
以上が、年齢別に見た結果であるが、筆者の三浦が2003年発表した「保育者養成における体育教育についての一考察(2)―幼稚園実習のアンケートかより―」³⁾で、同じように年齢別の遊びを調査している。その結果が、今回の調査結果とほぼ同様であり、遊ばれている遊びの種類や傾向は十数年経過しても変わっていないことがわかる。ほぼ同じとしているのは、前回の調査では、運動遊びに限定しないために一番多かった遊びが「砂遊び」であるためである。

さらに、同様の実態調査を実施し、発表している中村氏らによる「幼稚園における遊びについての実態調査―運動遊びを中心に―」⁴⁾でも、砂遊び、鬼遊びが上位となっている。

(3) 実習中に実施した部分実習について

実習に行った部分実習においては、グラフ7の通り、手遊び、絵本が22%で最も多く実施しており、次いで紙芝居、ピアノとなっている。筆者らが期待している運動遊びを取り入れた学生は全体の6%27名しかおらず、短時間の設定では取り入れにくいと言う結果であった。

図7 部分実習の内容



全体の6%ではあったが、実際に運動遊びを取り入れた学生の内容については、表5で示す通り、しっぽ取り、鬼ごっこ、ボール遊びを取り入れている。

表5 部分実習で取り入れた内容

	内 容	人 数
1	しっぽ取り	5
2	鬼ごっこ	4
3	ボール遊び	4
4	ドッジボール	3
5	なわとび	2
6	ミニ運動会	1
7	ジャンケン列車	1
8	イス取りゲーム	1
9	旗上げゲーム	1
10	風船ゲーム	1
11	内容未記入	4

(4) 実習中に子どもと遊んだ運動遊びについて

実習中に子どもと遊んだ運動遊びは、鬼ごっこが多く、約8割の学生が実施している。子どもと一緒に遊ぶ＝鬼ごっこと言って良いくらい、道具もいらず手軽に遊べる利点が鬼ごっこにはあるからと推察できる。

次いで、リレー・かけっこ走る運動遊びが上位を占めている。それ以外には、ボールや固定遊具を使った遊びなどが続いている。

宮下は「幼稚園における遊びについての実態調査―運動遊びを中心に―」⁵⁾の報告で、子どもとした自由遊びで最も多かったのが、鬼ごっこ、かけっこ、鉄棒と報告している。本研究でも鬼ごっこ、かけっこ、リレー、が上位となっており、宮下の報告と同じである。

表6 子どもと遊んだ運動遊び

	内 容	人 数
1	鬼ごっこ	79
2	リレー・かけっこ	31
3	サッカー	12
4	一輪車・三輪車	9
5	固定遊具	8
6	ボール遊び	8
7	かくれんぼ	8
8	なわとび	6
9	ダンス	6
10	体操	6
11	しっぽ取り	3
12	ゲーム	1
13	跳び箱	1

(5) 実習中の助言について

子どもと遊んでいるときに、実習生から援助や声かけをして提案したことは、という設問に対して、特にしていないという学生が多かったが、以下のようなか確な助言、声かけ、提案を行っている学生もいる。

- 1, 鬼ごっこのトラブル対応
- 2, サッカーボールの蹴り方
- 3, ルールの確認や提案
- 4, ボールの投げ方

1の鬼ごっこのトラブル対応を書いている学生が一番多く、特に多かったのが鬼になる子どもが同じになること、鬼が誰かわからなくなることをあげている。助言としては、鬼役を順番にする、赤白帽を利用して鬼をわかりやすくすることで対応している。基本的な対応の仕方であり、遊びの流れを崩すことなく対応できている。

次に多かったのは、3のルールの確認や提案で、鬼ごっこでは、様々な種類の遊びを提案、ルールが複雑なものを簡単にすることを提案、グループ編成を調整など、学生が出来る対応がきちんとあされて

いる。

2, 4は、ボールを使った活動での技術的な指導である。サッカーを楽しんでいる子どもの中に、なかなかゴールが決めれない子どもがいて、蹴り方を教えた。ボールを投げるのに遠くに飛ばない子どもに、身体全体を使って大きく腕を振ることを教えている。

学生は、子どもと楽しく活動を共にしながらも場の状況を判断し、対応する能力が大切であり、実行できている学生もいる。しかし、中には一緒に遊んだだけで、こうすれば良いのにといいながらも何も言わなかったという学生もいた。

子どもに対する技術指導の方法を運動機能別に授業に取り入れていく必要性を感じる。

(6) 責任実習（総合実習）について

責任実習についての設問では、全体の約6割が工作・制作・ごっこ遊びなどを実施している。運動遊びを取り入れている学生は約4割であるが、工作をしてから運動遊び、ゲームをしてから運動遊びなど組み合わせで実施しているケースが多くなっている。

表7 責任実習（総合実習）の内容

	内 容	人 数	割合(%)
1	運動遊びを取り入れた	46	43
2	運動遊びを取り入れていない	61	67

今回の調査で、運動遊びを導入したのは全体の43%にあたる46名の学生が実施した内容は表8に示す通りである。

表8 運動遊びの内容

	内 容	人 数
1	しっぽ取り・工作やゲームの組み合わせ	9
2	表現遊び（変身ごっこ・リトミック）	7
3	ボール遊び（ドッジボール含む）	7
4	フリスビー・工作との組み合わせ	5
5	ゲーム（風船・イス取り・猛獣狩りなど）	5
6	野球（新聞紙で道具を作って）	3
7	鬼ごっこ（レンジ鬼・氷鬼ほか）	3
8	わらべうた遊び	2
9	ジャンケン列車	2
10	ダンス（制作との組み合わせ）	1
11	フラフープ	1
12	ミニ運動会	1

責任実習のすべての時間を運動遊びに使うのは子どもの体力的な問題もあるので、複合的に組み合わせて実施することが望ましい。

実践例にもあるように、

- ①新聞紙を使って野球道具（バット・グローブ・ボール）を作成して、実践する。
- ②紙皿を使ってフリスビーを作成し、実践する。
- ③お面などを作成し、リトミック活動を行う。
- ④制作との関連性はないが、制作活動、ゲームなどを実践する。

実際に実践した学生は1名であったが、ミニ運動会として、運動遊びや体育的内容（平均台や跳び箱利用）を取り入れている。

宮下氏の報告では、学生が実習で指導した遊びで一番多かったのが、鬼ごっこで、容易に幼児の活発な活動が確保できる遊びである点が大きく影響していると述べている。次いで、多かったのがその他としてまとめられているが、ゲーム（フルーツバスケット、ハンカチ落とし、イス取り、しっぽ取り）、歌遊びとなっている。宮下氏の報告は、責任実習でのという限定ではないので、今回の調査と比較は出来ないが、遊びの種類や傾向は今回の調査と同様であることがわかる。学生が指導する運動遊びはある程度、決まっていることが推察できる。

体育Ⅰ・体育Ⅱの授業内では、調査に上がっている遊びは単独で実施することが多く、他の活動との

複合的な遊びの方法や指導法を取り入れていく必要性を感じた。

そのためには、運動遊びを主とした模擬保育のような実践も多く活用していきたい。

(7) 外部委託で体育（運動）指導を実施しているか。

今回のアンケート調査で、園の方針として意図的に体育（運動）遊びを取り入れたり、外部委託で実施しているかを最後に調査した。

結果は、表9に示す通りである。一つの園で複数実施している園、アンケートを園別で実施していないので数字については参考として掲載する。

表9 外部委託の現状

	内 容	人 数
1	体育・体操教室	34
2	サッカー教室	23
3	スイミング	6
4	ダンス	4
5	フラダンス	2
6	剣道	2

外部委託で最も多いのは、体育・体操教室で、実施の頻度は、毎日～月に1、2回程度となっている。多い園では、体操教室、スイミング、ダンス、サッカーと多くの活動を取り入れている。フラダンスや剣道を取り入れている園もあることに驚いた。

宮下氏による報告によると、外部委託による運動遊びの導入は、幼稚園で86%、保育所31%となっている。その理由として、運動遊びの指導は、専門性を要求されるということ、保育者の高齢化や女性の保育者が多いという現場の事情から、運動指導を専門に行う講師の派遣を依頼していると述べている。そして、内容は、体操・幼児体育系が最も多く、次いでスイミングとなっている。

本研究の調査でも、体育・体操教室が多くなっていることは10年経過しても変わっていない。しかし、今回の調査で2位だったサッカーについては、宮下氏の報告では11園しか実施しておらず今回の調査よ

り導入が少なかった。この10年間でサッカーが子どもたちの間で人気となっていることがわかる。

4. まとめ

本研究では、専門科目として開講している「体育Ⅰ」「体育Ⅱ」での学びが、幼稚園教育実習2次において実施される責任実習（総合実習）にどのように活用されているか、指導する上での難しさ、課題など指導法について調査、研究した結果、次のような結果を得ることができた。

責任実習において運動遊びをとり入れた学生は、全体の43%、46人であった。この数字は、筆者らが予想していた30%よりも高くなっている。その理由は、導入の方法が運動遊び一つを限定するのではなく、活動を複合的に組み合わせることにより、予想より多くの学生が実践したと推察できる。今回の研究での設問の仕方が、「責任実習に運動遊びを取り入れましたか」という問いであったために、学生の中にはメインで運動遊びを取り入れていなかったから取り入れなかったと回答したと話した学生もあり、設問の仕方ですぐに取り入れた学生が多くなったことが推察される。

具体的な助言などの指導上の記述を見ると、運動遊びの指導については、ボールなどの蹴り方、投げ方のような技術的な指導と、遊び方、ルールなどの方法論に大別されている。現在の「体育Ⅰ」「体育Ⅱ」では、遊び方、援助の方法については実践しているが、技術面の指導については、園児が経験する基本的な動作別での取り組みが必要である。文部科学省が策定した、幼児期運動指針では、幼児期に獲得しておきたい基本的な動きとして、立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなど「体のバランスをとる動き」や歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべるなど「体を移動する動き」、持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引くなどの「用具などを操作する動き」の三つを挙げている。

そして、日常生活や体を動かす運動遊びの中でこれらの動きを経験し、多様な動きを身につけていくことが、生涯に亘って心身共に健康的に生きていくことに繋がると述べている。

本研究の対象としている授業では、遊び自体を経験し、その指導法を展開しているが、実習の中での活動として位置づけ、トータル的な指導法についての内容が不十分である。さらに、運動指針で述べている、三つの要素を意識し、具体的な動きに着目した指導法の展開が重要であるとともに、遊びを複合的にとらえ、模擬保育などの実践も今後必要であることがわかった。

5. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：「子どもの体力の現状と将来への影響」文部科学省中央審議会第24回配付答申、2002
- 2) 文部科学省：幼児期運動指針ガイドブック、2012、p 8-28
- 3) 三浦累美：「保育者養成における体育教育についての一考察(2)－幼稚園実習のアンケートより一、松山東雲短期大学研究論集第34巻、2003、p 13～p 21
- 4) 中村尚子他：「幼稚園における遊びについての実態調査－運動遊びを中心に－」、立教女学院短期大学紀要第19号、1987、p 101～p 131
- 5) 宮下恭子：「幼稚園・保育所における運動遊びとその指導に関する考察－実習生の調査から－」、東京成徳短期大学紀要第40号、2007、p 27～p 44
- 6) 岩井幸博：「教育実習先の幼稚園において園児が経験する基本的な動作と運送遊びの実施状況に関する調査」、貞静学園短期大学紀要1号、2013、p 101～p 112
- 7) 中村尚子他：「幼稚園における遊びについての実態調査－運動遊びを中心に－、立教女学院短期大学紀要19、1987、p 101～p 131

- 8) 小黒美智子：「幼児の運動遊びに関する研究－
幼児の運動遊びの環境と保育者の意識に関する
調査より－」、新潟青陵女子短期大学研究報告
第28巻、1998、p 49～p 62
- 9) 小黒美智子：「幼児の運動遊びに関する研究－
遊び場の固定遊具の活用に関する調査から－」、
新潟青陵女子短期大学研究報告第26巻、1996、
p 31
- 10) 丸井一誠他：「女子短大生における幼児への運
動遊びの指導に関するグループ学習の効果－運
動有能感と心配に着目して－」、金沢星稜大学
人間科学研究 9(1)、2015、p 31～p 34
- 11) 田中沙織：「幼児の運動能力と基本動作に関す
る研究－自由遊びに見る運動能力別の基本的
運動動作比較－」、幼年教育研究年報第31巻、
2009、p 83～p 88
- 12) 中嶋雄一編：『実践新・幼稚園教育要領ハンド
ブック』、学習研究社、2004、p 181
- 13) 岩崎洋子編：『保育と幼児期の運動遊び』、萌文
書林、2008
- 14) 井上勝子編著：『すこやかな子どもの心と体を
育む運動遊び』、健帛社、2006
- 15) 近藤充夫、『幼児のこころと運動 その発達の
指導』、教育出版、1995